

オーブ^{''}連合首長国 ヘ
イズというオペレー
ター

/Null

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガンダムSEEDの世界へと転生したセレン・ヘイズのお話

目次

オーブ連合首長国 ハイズというオペ

レーター

1

オーブ連合首長国　ヘイズというオペレーター

燃え盛る炎の中に見えるのは、この戦争によって破壊された国の姿。

軍事施設と思われる場所は、文字通り壊滅。病院や学校、民間の施設であっても例外はない。

無差別？残虐？非道？

：．．いや。戦争なんて、どの世界でも同じようなものだ。全てを奪い、全てを焼き尽くすまで終わらない。それが真理なのだ。

戦争には勝たなければ意味がない。

死んで得られるものなど、何も無いのだから．．．。

「ウズミ！」

「……ヘイズ、か」

通信越しに映るそいつの名はウズミ・ユラ・アスハ。今まさに戦火に包まれている
オープ首長国連邦の首長であり、私たちを雇った雇い主である。

「今回は色々、迷惑をかけたな。報酬はきちんとは全額支払っておる。長きに渡るお前
たちとの契約もこれで終わりだ」

「チツ。最初からそのつもりだったんだろが」

相手は地球連邦。こちらは補給も後ろ盾も無い、小国の軍隊のみ。結末など、誰が見
ても分かりきっていた。

同じ地上に住んでいるというのに、1国だけが対立したらどうなるか。そんなもの火
を見るよりも明らかだ。足並みの揃わない小国に対して大国が行う事なんてただ一つ。

武力による見せしめだ。

従わないとどうなるか——

：： まるでラインアークだな。

企業支配を肯定しない自由主義の集まり。「来るもの拒まず」の精神で様々な人間を受け入れたあの組織。

だがその結末は破滅だ。

あの戦闘でラインアークはホワイトグリントを失い、そのままずると破滅への道を迎った。

結局、それも分かりきっていた結果。

伝説のレイヴンとはいえ、数多くのリンクスを抱えている企業連に勝てる未来などない。

：： まあ、ステイシスとの戦闘は見事だったがな。

この国はラインアークよりは上手くやったが、結果は似たようなものだ。己たちの信念を貫くために。この戦争の結末を悟りながらも自身の破滅を選んだ。

私は忠告したぞ？この居場所を提供してくれた貴様らに、恩義を感じてな。だが、結

局はこのザマだ。

何も変わっていない。あの世界と同じだよ、ウズミ。

「貴様らはどうする気だ。言ったはずだぞ？死んで得るものなど何も無いと」

「確かに、その通りやもしれぬ。ここで我々が死ねば何も残らぬと。だがなヘイズ。国とは人、そして意志なのだよ」

「…」

「人無くば国は成らず。意志無くば人は来ず。幸い、民間人の避難は完了している。そして、我らはここで想い、そして意志を残した。それは無事、宇宙へと飛んだ」

ウズミの視線の先には、マスドライバーによつて打ち出されたカグヤの姿。その船体には白い機体と赤い機体、そして黒い機体が見える。

「あとは、我らの責めだ。貴様らは何処へなりとも行くがよい。それが山猫^{Lynx}というものであろう？」

「…フツ。そうか…。なら私たちもこれからは好きにさせてもらうさ」

「出来るならば彼らの、そしてカガリの手助けをしてもらいたかったが…」

「フン。私たちは傭兵だ。どの陣営に付くかなどは契約次第。明日には敵になっているかもな」

金も受け取った今。こんな敗戦確定の陣営に居座る意味などない。私たちは傭兵。

己の命を守るのは己のみ。

…だが。

「この弾薬は貴様らでしか製造できない。ならば答えなど分かっているだろう」
「すまぬな」

「言つたはずだ。好きにする、と」

宇宙へと放たれた彼らが平和の象徴たる鯨となるか、それともシャチORCAとなるか。
そんなもの、あの世界で失敗した私には分かるわけではない。

だが、貴様は信じているのだろうか？

彼らを。そして、朝日に照らされ暁色に輝く、焰ホムラの意志というものを。

ならば、最後まで見届けてやろう。

彼らの行く先。

それを見届けるのも、悪くない。

「…ん？…セレン？」

「：：ん？：： ああ、すまん。少し、前の事を思い出してな」

「そうか：：」

ウズミ：：。 貴様の死によつて護つた種は若葉となり大樹へと至つた。そして今まさに人々を救うために葉を^翼広げている。

この光景を、貴様が見ればなんと言うだろうか。

私に対して勝ち誇つたような笑みを浮かべるか？

フツ。それもいだろう。

思えばこの世界に迷い込んでから、貴様らオープンとの関係は驚くほどに長かつたな。こんな根無草である私たちの居場所が出来てしまう程に。

だが、この世界は余りにも似過ぎてているんだ。私たちが居た、地獄のようなあの世界に。

高貴なる者たちは空へと昇り、そうでない者たちは皆、劣情感を味わいながら地上を這いつくばる。

そして人類のためには人の死を厭わない馬鹿ども。

核兵器。サイクロプス。眼前に浮かぶ要塞、ジエネシス：：。

自然豊かだった緑の大地は、数々の兵器によつて荒廃の大地へと変貌した。

頭の腐つた馬鹿がすることなど結局どの世界でも同じ、という事か。

だからこそ私は目の前にいるこいつの事が気になった。あの世界で人類種の天敵となった、私の相棒^{最愛}のことが。

だがその考えは杞憂に終わった。

いつだったのだろうか、こいつに聞いたんだ。

あの世界で私を倒した後、結局お前の答えは成就したのか？と

その答えはノーだった。

「人類種の天敵となった俺は、この身が果てるまで止まらなかった。全てを焼き尽くし、次の世代へ未来を託すために。俺が絶対的な天敵として君臨し続けている間、残された人類は俺という敵と戦う事で結束し、企業が手を取り合い新しい未来を創ると思つた。……だが——

「所詮は上っ面だけの結束だった。ということか」

「……ああ。結局俺はあの世界の本質を変える事はできなかったんだ」

無理もない。あの世界とはそういうものなのだ。

「だから俺は、この世界で抗う彼らを見届けることにした。彼らの掴んだ答え。それがあの世界で俺の掴んだ答えと、どう違うのか」

そう言つてこいつは先程までの悲壮感を払い、柔らかな表情を浮かべて彼ら^{キタたち}の背中を見つめ直した。

… どうか。ならばそれが、この世界でお前が見つけた答Answerえなんだろう。

奇しくも、この世界に来て変わったのは私だけでは無かったようだ。まあ… もし変わっていないかったのなら、山ほど説教するところだったかな。

だが、傭兵としては存外甘い男になってしまったようだな、お前も。そして、私も。

次の戦いがアルテリア・カーパルスほどの激闘となれば、こいつは負けるかもしれん。

… いや、今回の私は、お前側だったな。そして、彼らも…。

… フツ。なんだ。考えてみれば今回の方が勝率は高いじゃないか。

あの時とは違い、こいつは今世界を壊す側でなく、私と共に守る側として立っている。それもこれも道を踏み外さなかった彼らのおかげ… か。

ならば、今回こそ証明して見せようじゃないか。私「たち」の答Answerえを。

昔未使言えなかつた言葉音声をまた胸にしまい込み、眼前に浮かぶビジネスを睨む。

「これがお前にとって… いや、私たちにとって最後の戦いだ」

たとえ世界が変わり私たちが変わったとしても、お前ストレイトに掛ける言葉はあの世界にいた時から変わることはない。

「生きて戻れ。それがお前の責任だ」